

駅前商業地域内の高層集合住宅における実測調査と住民意識アンケート調査および懇談会
住民主体の住環境改善活動の促進を目的とした自治会・町会との共同実測と住民意識に関する研究 その4

主体性 騒音 アンケート調査
二酸化窒素濃度 回収率 懇談会

準会員 菅谷大樹*1 正会員 近藤良一*2
正会員 鍋島大典*3 同 三浦昌生*4

1. はじめに

本研究では、ソフィア上尾自治会地区を対象とした騒音実測調査、二酸化窒素濃度実測調査およびアンケート調査の結果と、それらの結果をもとに住民と住環境について話し合った懇談会について報告する。

2. 騒音実測調査

04年10月31日(日)13:00~16:25に同地区内において住民と共同で騒音実測調査を実施した。同自治会はJR高崎線と隣接している。そのため電車による騒音や自治会付近の踏切の警報音に対して、住民の関心は高い。また自動車による騒音への関心も高い。住環境新聞や自治会設置の掲示板、自治会長の呼びかけにより、実測には12名の住民が参加した。A棟、B棟の2・4・6・9・12・14階の各階両端とC棟の1、2階・4、5階中間の階段踊り場の各階両端、計28地点の15分間の等価騒音レベルを計測した。計測地点全体を通して環境基準を上回る地点はなかった。図1からA棟、B棟において、9階を境に高層階では低層階に比べ騒音レベルが低くなっていることがわかる。その中でA棟、B棟ともに4階における騒音レベルが一番高くなり、各棟とも北側

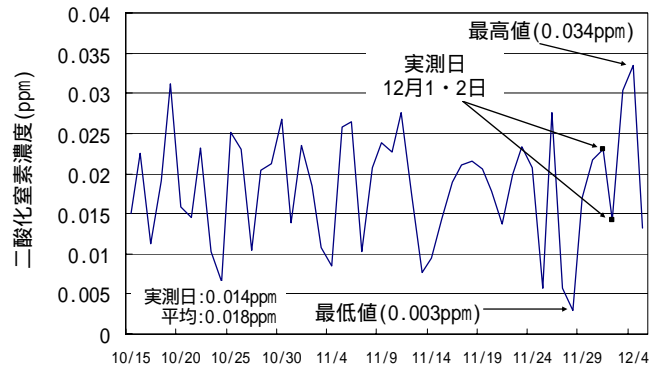


図3 上尾測定局における二酸化窒素濃度変化

表1 二酸化窒素濃度実測調査に参加した住民の意見(抜粋)

- ・前は洗濯物を出してそのまま朝まで干していたことがあったが今は乾いてなくてもしまっている。やはり空気が汚れている気がしていたのは確かである。
- ・もっと一般住民の方々に参加して貰うため他地区で成功したことやアドバイスがあったら教えてもらいたい。
- ・駅の近くでするので、車、その他の激しいところです。どのくらい離れたら汚染の差が出るのかなと興味を持った。
- ・今回の結果をぜひ広報で知らせてもらいたい。
- ・カプセルのフタが開けづかった。
- ・以前より空気の汚染には大変苦慮している。小さい子供などへの影響を考えるととても気になる。

方向の騒音レベルが高い結果となった。北側方向の騒音レベルが高い要因として、A棟、C棟に関しては道路・商業施設、B棟に関しては線路からの距離がそれぞれ騒音レベルに反映していると考えられる。

3. 二酸化窒素濃度実測調査

04年12月1日(水)20:00~2日(木)20:00に同地区内において、自治会住民を対象として二酸化窒素濃度実測調査を簡易測定法により実施した。使用するカプセル約1500個を14名の住民と作成し、自治会役員を通じて同自治会479世帯に3個1セットで配布した。事前に自治会主体で掲示資料を作成し、自治会内設置の掲示板により参加を呼びかけた。その結果、288世帯(回収率60%)の住民が参加した。各棟・階別の結果を図2に示す。各棟とも、概ね0.02ppm~0.03ppmとなった。また図3は対象地区に最も近い上尾測定局における04年10月中旬から12月上旬までの二酸化窒素濃度の日平均値の推移である。実測日当日の二酸化窒素濃度は平均的な値であることを確認した。実測参加者の意見を表1に示す。空気汚染に対する関心の高さが確認できた。

4. 第2回アンケート調査

04年12月上旬に住民の実測調査後の意識を把握するため、同自治会476世帯を対象にアンケート調査を行った。その際、アンケート票とともにこれまでの調査結果をまとめた住

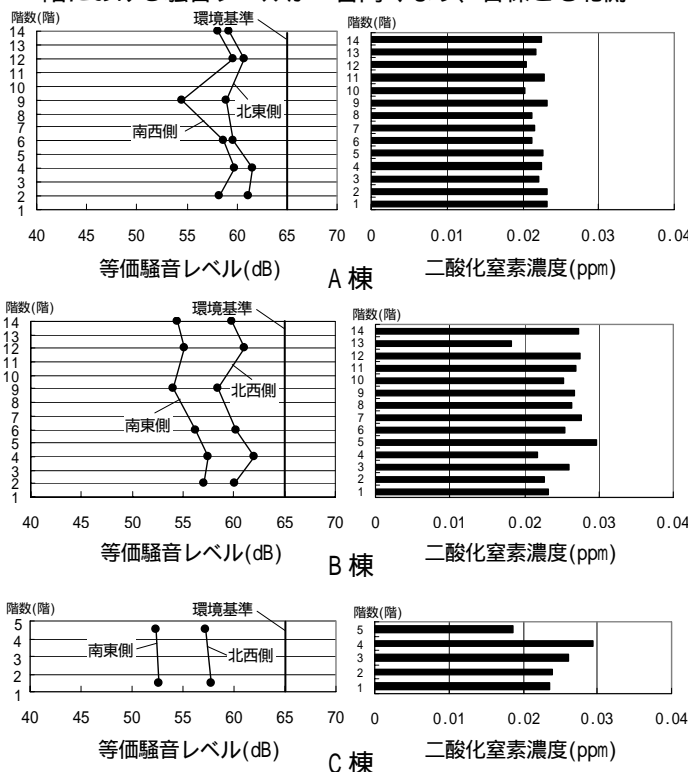


図1 棟・階別における等価騒音レベル (2004.10.31 13:00~16:25) 図2 棟・階別における二酸化窒素濃度 (2004.12.1.20:00~12.2.20:00)

Questionnaire Surveys, Field Surveys and Discussions with Residents in High-Rise Apartment Houses in the Commercial District near a Railway Station
A Study on the Promoting for Improving Own Living Environment Based on the Collaborative Survey Data and Residents' Conscious with the Residents' Association Part4

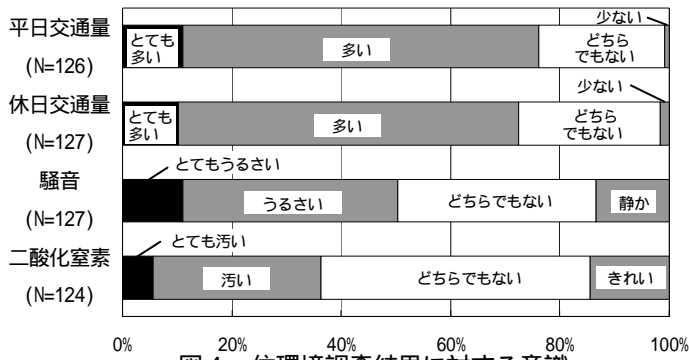


図4 住環境調査結果に対する意識

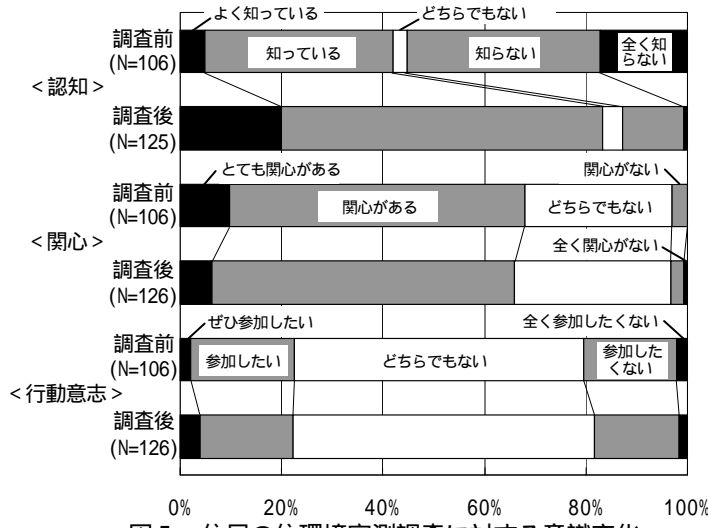


図5 住民の住環境実測調査に対する意識変化

表2 アンケート配布に対する自由記入(抜粋)

・ナンバリングが打たれていると匿名性が損なわれる。必要ならば納得の記名式のほうがよい。
 ・袋に何も書かずにポストに入っていると中を見ずにそのまま捨ててしまう。封筒に何か書くべきでは。

環境調査結果報告書を同封した。アンケート項目は住環境調査結果に対する意識や実測調査後における住民の意識を問う内容で構成し、実測調査前との意識を比較した。

アンケート票は自治会役員が各戸別に配布し、自治会内設置の回収ポストに投函あるいは管理事務所に持参する方法で回収を行った。その結果、127世帯(27%)から回答を得た。住環境調査結果に対する意識について聞いた結果を図4に示す。交通量に関して、平日・休日ともに「とても多い」、「多い」をあわせた回答率が70%となり、同地区において深刻な問題であることを改めて確認した。騒音に関しても「うるさい」側の回答率が50%となった。次に実測調査前に実施した第1回アンケート調査と実測調査後に実施した第2回アンケート調査の「認知」、「関心」、「行動意志」の比較結果を図5に示す。「認知」において「知っている」側の回答率が42%から83%になった。また「どちらでもない」との回答率が「関心:31%」、「行動意志:60%」となり、どのように関心、行動意志を高めるかが今後の課題といえる。アンケート配布に対する住民の意見を表2に示す。ナンバリングに関する事など配布物に対する意見が聞かれた。

表3 アンケート内容に対する住民の意見(抜粋)

・文字が小さい。高齢者の多いところでアンケート調査を実施する場合、フォントを大きくするべきである。
 ・選択肢が、必要ないところまで多い。例えば、前の設問の流れにより、3択でよいところもすべて5択で回答させようとしている。
 ・誰が書いたか判るアンケートでは自由記入欄は書きたくないと思う人が多いので、ナンバリングされたアンケートでは選択肢のみ内容で構成して、自由記入欄はナンバリングされていない別紙で回答させるとよいのではないかと。

表4 同自治会における回収率推移

| 調査項目 | 第1回アンケート調査 | 二酸化窒素濃度調査 | 第2回アンケート調査 |
|-----------|----------------------------|-----------------------------------|----------------------------|
| 配布日 | 2004年9月13日(月) | 2004年11月27日(土) | 2004年12月11日(土) |
| 回収日 | 2004年9月23日(木) | 2004年12月5日(日) | 2004年12月17日(金) |
| 配布方法 | ポストに直接投函 | 各戸別全戸配布 (自治会発行の機関紙と一緒に配布) | 各戸別全戸配布 |
| 回収方法 | 自治会設置の回収ポストに投函あるいは管理事務所に持参 | 自治会設置の回収ポストに投函 | 自治会設置の回収ポストに投函あるいは管理事務所に持参 |
| 回収数 | 106世帯 (回収率21%) | 288世帯 (回収率60%) | 127世帯 (回収率27%) |
| 回収率向上の工夫点 | 配布方法 | 各戸の郵便受けに投函 | 各戸の郵便受けに投函 |
| | 告知方法 | 掲示板にて告知 (研究室が資料作成) 住環境新聞で告知 | 掲示板にて告知 (自治会、研究室が資料作成) |
| | 封筒の種類 | 無地の封筒に自治会の判子を押印 | 無地の封筒に自治会の判子を押印 |

5. 住民との懇談会

04年12月23日(木)、ソフィア上尾自治会館において懇談会を開催し、これまでの実測調査結果の報告、今後の同自治会の将来像について意見交換した。懇談会には10名の住民が参加した。その際、参加者の発言を促すため、ネームプレートを作成した。アンケート内容に対する住民の意見を表3に示す。アンケートの文字の大きさや選択肢の種類、回収率が低かった原因など住民から活発な意見が聞かれた。

同自治会における配布方法に基づく、回収率推移を表4に示す。二酸化窒素濃度調査の回収率が60%と他の調査に比べ高かった。高かった要因として、自治会発行の機関紙と一緒に配布したことや「カプセル」という「モノ」が配られたことで関心が高まり、回収率が高まったのではと住民から意見が出された。さらに自治会主体による掲示資料作成や積極的な参加呼びかけなどの広報活動も大きな要因と推測される。逆に第1回アンケート調査、第2回アンケート調査の回収率が戸建地区に比べ、低かった要因として、自治会費の集め方や自治会文化の違い、住宅形態の違いが回収率の差に反映されたのではとの意見も出された。本実測調査をきっかけに、住環境に興味を持ち、改善すべき点を早急に行政へ訴え、自分たちの住環境は自分たちで守り、改善していくべきと自治会住民が意見を総括した。

6. まとめ

実測に参加することで住環境に対する意識が高まることを把握した。同自治会において、住民の住環境への関心度は高い一方、行動意志は低い。いかに住民の関心を行動意志に変えていくかが今後の課題といえる。そのためには、まず自治会内で配布物における回収率を上げることが住民主体の住環境改善活動の第一歩につながる。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「実測調査に基づく住民主導の地区住環境づくりのための支援システムの構築」(研究代表者:三浦昌生)によるものである。

*1 芝浦工業大学学部生
 *2 トヨタコーポラ神奈川株式会社 (当時芝浦工業大学学部生)
 *3 株式会社 長谷工コミュニティ (当時芝浦工業大学学部生)
 *4 芝浦工業大学システム工学部環境システム学科 教授 工博

Bachelor Student, Shibaura Institute of Technology
 Toyota Corolla Kanagawa Corporation
 Haseko Community inc.
 Prof., Dept. of Architecture and Environment Systems, Shibaura Institute of Technology, Dr.Eng.